

幸田露伴の少年向け教訓話 ——その典拠をめぐって——

はじめに

明治十六年、幸田文の言葉を借りれば、露伴は「両親に学費の負担をかけないやうにと、汐留の電信修技学校へ給費生で入学、翌年卒業」し、明治十八年、「北海道余市電信分局へ、いさゝか給与のいゝことを取柄に十等技手として赴任した」（『看板のうら』昭和三十年七月『電信電話』）。しかし、明治二十年八月、勝手に辞めて帰郷してしまう。

この北海道時代に露伴は大量の仏典を読み込んだ。本人談によると、「北海道へは行李に二杯ほど本をもつていったが「略」たちまちそれらの本を読んでしまった」（小林勇『蝸牛庵訪問記』「昭和十三年」、昭和三十一年三月岩波書店）。そこへ、永全寺の東開和尚¹⁾が「仏経や禅書を沢山貸してくれた。露伴は、これは有難うと、その仏経や禅書を片端から読破した」（柳田泉『幸田露伴』「少年のころ」、昭和十七年二月中央公論社）。帰郷後も仏典を読んだために、「父は息子が坊主になるのではないかと思つたそうである」（塩谷賛『幸田露伴』上「処女作」、昭和四十年七月中央公論社）。

中原 理 恵

また露伴は、『消夏雜譚』「難陀」（明治二十八年七月二十三日『国会』）で「坪内逍遙氏が嘗て書きたるもの、中に難陀を好学の人なりしかの如く云へる節ありしが「略」却つて難陀は学を好まざる俗子たりしを知るのみ」と述べ、「何の好学のことかあらん、何の好学の事かあらん」と結ぶ。これは逍遙が、明治二十五年四月に「文玉菩薩の剛意見」（『早稲田文学』）で、森鷗外の前生は「難陀尊者といひ強記多聞第一の仏弟子、知れるが上にも尚知らんと「略」what? what? と学問したりし功德にて再び此の世の大導師と生れいでたるものぞかし」と述べたことを指そう。露伴の仏典知識に対する自信が窺える。

このように仏書に親しんだ露伴には、『般若心経第二義注』（明治二十三年八月と推定²⁾。昭和二十二年十月『文学』）、『一切経の伝』（明治二十七年二月『小国民』）、『蝸牛庵聯話』「金光明最勝王経」（昭和十四年十一月『中央公論』）、同「弁才天女」（昭和十四年十二月『中央公論』）など、仏典に関する評論や注釈が多く備わる。また、『伊舎那の園』（大正四年五月『婦人画報』）で、「この頃少し「華嚴経」を調べて居りますが、その中に婦人に関する面白い話を三つばかり見受

けました」として、続く『春の夜語り』二（大正五年六月『淑女画報』）、『道を尋ねて』（大正六年三月『婦人』）で、華嚴経の中の女性を紹介している。

その他、たとえば小説『婦女』（明治二十四、五年と推定³）で、『玉耶経』の七輩婦に倣って「当世七輩婦」を描き、談話『仏教に現れたる女性』（明治三十八年三月『文藝倶楽部』）でも『玉耶経』の七輩婦を語っている。史伝では、『大慈恩寺三藏法師伝』を典拠とする『真西遊記』（明治二十六年三月学齢館）がある。『解頤茶話』（明治二十六年七月六日『国会』）でも『百喻経』を用いて笑い話を仕立てていることは、前稿⁴で述べた。

さらに、仏典を典拠とした少年向けの教訓話もある。

・『宝の蔵』（明治二十五年七月学齢館刊。全十五話）。

・『印度の古話』（明治二十六年六月『小国民』。全二話）。

・『露伴夜話』（明治三十年四月『少国民』。全三話）。

・『五王子』（明治三十年十月『少国民』。全一話）。

『露伴全集』巻十（昭和二十八年七月岩波書店）・巻十一（昭和二十四年十一月）には「少年文学」にジャンル分けされた作品が三十九話収録され、上記の四作品はこの中に含まれる。『鉄三鍛』（明治二十三年一月『少年園』）が少年向けの第一作で、その後は、明治二十年代と四十年代後半に集中し、『米価問答』（大正元年八月『実業少年』）を最後に見られなくなる。これらは、小説、史伝、教訓話などに分類でき、『露伴全集』『月報』二十二（昭和二十八年六月岩波書店）の「編纂室より」は「二宮尊徳」「新西遊記」「日蓮上人」「鄭成功」「伊

能忠敬」の伝記類や、「宝の蔵」「文明の庫」の教訓・教育の書と並んで、これだけの少年文学の業績を遺したのは、明治の文豪の中にあつて露伴ひとりであらう」と、高く評価する。さらに、『少年文学史』明治篇巻上（昭和十七年六月童話春秋社）が、「幸田露伴子が、夙に印度の闍多迦に材を求めて、幾多未聞の奇話を紹介した一事は、亦忘るべきではあるまい」と述べるように、仏典を典拠にした少年向けの教訓話は、露伴ならではのものではあった。

上記のように、仏典を用いた作品は評論、小説、史伝など広く見られた。幸田文が、「父の文学に現れる孤独感と激しい感受性は、人生の出発点である青春時代に過ぎた荒涼とした余市で培われたものと思います。とくに、日本海の激浪が、哀感をあおり、仏教的思想を生み出すようになったと思います」（読売新聞北海道支社編『北海道の百年』昭和五十年八月読売新聞社）と言うように、露伴文学における仏典の意味を考察することは不可欠であろう。本稿では、上に記した、仏典を典拠とした少年向け教訓話の典拠を明らかにし、分析することにした。

一、少年向け教訓話の典拠

『宝の蔵』は明治二十五年七月学齢館から刊行、のち明治三十五年二月に『宝の蔵』『宝の山』の二分冊として春陽堂から再刊、さらに大正七年七月に再度一冊に合冊し、『宝の蔵』として春陽堂から再々刊。初版は、「よみはじめ」、本文全十五話、「よみをはり」から成る。再

刊「以下「再版」『宝の蔵』は、「よみはじめ」、初版の第一・二・十五・十一・十三・七・十四話、「よみじまひ」。『宝の山』は「よみはじめ」、第四・三・五・九・六・十・八・十二話、「よみじまひ」。合冊版「以下「三版」は、『宝の蔵』『宝の山』の話の並び方をそのまま引き継ぐ。つまり一冊ではあるが、初刊とは話の並びが異なっており、「よみはじめ」、上記全七話、「読みて後聞きて後」、「又の日の会」、上記全八話、「よみじまひ」となる。「読みて後聞きて後」「又の日の会」は、それぞれ「よみじまひ」「よみはじめ」に当たる。

初版と再版との大きな異同は、巻末に置かれた教訓のまとめ「よみをはり」或いは「よみじまひ」であるが、詳細は第五章で述べる。三版は露伴が序で、「二十年前の文辞、今に於て予の改めんと欲するもの、固より少からず、然れども結構既に成れば、柱楹^{ちゅうぎょう}換へ難きものあり、已むを得ず一切旧に従ひて、たゞ其の爛脱を補修するに止む」と述べるように、再版と大きな異同はない。

『露伴全集』巻十一（前掲）「後記」は「旧全集〔昭和五年七月岩波書店『露伴全集』巻五〕は再刊二冊本を用ゐるが、本全集は幸田成友所蔵の初刊本原稿を用ゐる再刊本「再版」・旧全集を校合した」と述べる。「初刊本原稿を用ゐた」と言うが、全集の本文は初版『宝の蔵』と異同が多く、むしろ再版・旧全集に極めて近い。

なお、『印度の古話』『露伴夜話』『五王子』は、全集と初出の本文に大きな異同が見られず、単行本、旧全集（昭和四年十一月～五年十月岩波書店『露伴全集』）に入らない。

さて、露伴は初版『宝の蔵』『緒言』で、「飯後茶間に妹等と談笑す

るに及んでは「略」百喻百縁の類、胸臆に浮ぶもの一則或は二則をとつて語」っていたのを、「学齢館主「高橋省三」の知るところとなつて」、「此書を成すに至れり」と出版の経緯を記し、「唯我の我が小妹に与ふるところの者を以つて直に我が年少者に餽^{くわく}のみ」と述べる。さらに、三版『宝の蔵』『序』で、「仏典中の譬喩談に就きて児童に取りて興あるべしと思ふものを撰み、語を補ひ義を衍べて、之を世に公にせり」ともいう。「印度の古話」冒頭には、「前に宝の蔵と名づけて学齢館の需めに応じ出版せしめしに、おもひのほか面白しとて少年諸子の、猶其他にも話ありや有らば聞かせよと云ひ越し玉ふもあるまゝ、今また一条の物語りをこゝに載すべし」と記されるように、『宝の蔵』の好評によつて『印度の古話』が書かれたと考えられる。

『露伴夜話』も冒頭で、「年ゆかぬ人々のために、仏経^{ぶつせう}の中に見えたる譬喩、または久遠世のものがたりなんどの興あり、と我が覚ゆるを取り出で、少しく言葉を添へつ、或は削りつして、語るべし」と述べる。「五王子」は、タイトルに「お伽噺」と添えられ、末尾で仏説からの寓意だと明かされる。なお、塩谷賛も『幸田露伴』上（前掲）「新羽衣物語」で指摘するように、『露伴夜話』『五王子』は口語文で書かれ、『宝の蔵』『印度の古話』の文語文とは異なる。

以上により、これらの作品は、露伴が子供たちのために仏典から喩え話を選んで書いたことが分かる。

二、大蔵経

仏典を典拠とした少年向けの教訓話は、『大蔵経』に拠って書かれている。妹「安藤幸」の記憶によれば、露伴が明治二十四年に購入した谷中の家の「中廊下ぞひの戸棚に「一切経」がはいつてゐた」、「そ

の一切経は和綴の活版本であつた」という⁵⁾。柳田泉「露伴先生蔵書瞥見記」（昭和四十一年三月四月『文学』）には『大日本蔵経』、『大日本統蔵経』、『大正新修大蔵経』の三種が記載されている。前二者は、明治十四年と十八年刊行の『大日本校訂大蔵経』（『縮刷蔵経』）と明治三十八年と大正元年刊行の『大日本統蔵経』のことと考えられる⁶⁾。

『宝の蔵』（以下、断らない限り初版に拠る）は、目録で、「十誦律卷九、縮、張三ノ五十九丁」のように典拠を明らかにしている。「縮」とは『縮刷蔵経』の略であり、「張三」は千字文の順でつけられた函の名とその第何冊かを示す。すなわち「張三」とは「張」の函の第三冊の意。対照すると、露伴が明示した典拠は、『大日本校訂大蔵経』（『縮刷蔵経』）の丁付けに一致する。但し、『宝の蔵』第九・十話のみ、「雑宝蔵経卷八、旧、既八ノ二十一丁」、「雑宝蔵経卷二、旧、既二ノ二二」のように、「旧」と記される。「旧」とは、鉄眼『黄檗版大蔵経』（天和元年「一六八一」成立⁷⁾）を指す。「縮」の『縮刷蔵経』よりも「旧」大蔵経は、天海『天海版大蔵経』（慶安元年「一六四八」成立）と『黄檗版大蔵経』であるが⁸⁾、照らし合わせると、第九・十話の『雑宝蔵経』の丁付けは『黄檗版大蔵経』に一致する。これにより、露伴は黄檗版で『雑宝蔵経』を見たことが分かる。ちなみに、「一切経の伝」

（前掲）では「今猶続々印刷して海内に流布する黄檗本」とある。

『雑宝蔵経』は、因縁・譬喩などの諸経や物語を含めて集録した雑集経である⁹⁾。『縮刷蔵経』にも所収されているこれを、なぜ露伴はわざわざ『黄檗版大蔵経』で読んだのだろうか。三版『宝の蔵』序文で、「其の題して宝の蔵といふものは、雑宝蔵経の名に因むのみ」と明らかにしていることから、露伴は『雑宝蔵経』に特別の思いを抱いていたことが窺える。「我が初めて仏書を読まんとしたる時は実に此経「般若心経」に縁ありて、折本になりたる無注のものを広小路にて得たる」（前掲『般若心経第二義注』）とあるように、初めて『般若心経』を手にしたのち、明治二十四年頃に『縮刷蔵経』を購入するまで、露伴は黄檗版『雑宝蔵経』を有し愛読していたのではないだろうか。なお、『宝の蔵』に続く『印度の古話』も、露伴は言及していないが、『雑宝蔵経』が典拠である。

ここで、上記の教訓話の典拠について整理しておきたい。『宝の蔵』は典拠が目録で詳細に示されるが¹⁰⁾、『印度の古話』は記載なし、『露伴夜話』は話の末尾に「仏説雑讀経」「仏説腹使経」「仏説是我所経」と書かれ、『五王子』は「拠仏説」とのみ記される。以下、『雑宝蔵経』は『黄檗版大蔵経』（文政四年「一八一二」貝葉堂）を用い、その他は『大日本校訂大蔵経』（明治十八年十二月弘教書院）に拠って、調査結果を示す。

『宝の蔵』

・第一話「善牙獅子と善搏虎と両舌野干との話」

『十誦律』九(五十九丁裏)、『弥沙塞部和醯五分律』六(三十四丁表)。
獅子と虎の仲を裂いて自分が得をしようと企んだ狐が、それを見破られて殺される話。

・第二話「烏と鶏との間の雛の話」

『摩訶僧祇律』二十四(六十九丁裏)。

烏と鶏の間に生まれた雛が、どう教えても、父のようにも母のようにも鳴けない話。

・第三話「毒箭に中りたる愚人の話」

『中阿含経』六十(九十七丁表)、『仏説箭喻経』(八十九丁裏)。

毒矢に当たった愚人が、矢の飛来した方角等を無駄に思案するうち、毒が回り死ぬ話。

・第四話「猿と虬との話」

『仏本行集経』三十一(四十二丁表¹¹⁾)、『生経』「仏説鼈獼猴経」十(二十八丁表)。

猿の心臓を獲るため計略を立てた虬が、猿の機転に騙され失敗する話。

・第五話「象と猿と巔多鳥との話」

『四分律』五十(二十九丁表)、『摩訶僧祇律』二十七(八十六丁裏)。

象と猿が年長者の巔多鳥を敬い、巔多鳥が昔語りをして知恵を授ける話。

・第六話「涼にかゝりし鹿の話」

『仏説鹿母経』(二丁裏)。

罨に落ちた母鹿が、小鹿のために一時放たれるも、獵師との約束を守

り戻ってきたので、その信義に報い解放される話。

・第七話「記念野干と老獅子王との話」

『十誦律』三十六(三十六丁裏)。

老いて穴に落ちて見捨てられた獅子を、狐が恩返しのため助ける話。

・第八話「水牛と猿と人との話」[目次は「水牛と猿と樹神との話」]

『生経』「仏説水牛経」三十(四十三丁表)。

水牛が猿から辱めを受けても、必ず報いがあると云って放置し、その通り猿が死ぬ話。

・第九話「梟と鳥との話」

『雜宝藏経』八(二十丁裏)。

梟と鳥が憎み合って争いをする中、知恵のある鳥の策略が奏功し、梟が全滅する話。

・第十話「兎他の善を助くるに勇猛なる話」

『旧雜譬喻経』下(二十四丁裏)、『生経』「仏説兔王経」三十一(四十三丁裏)、『雜宝藏経』二(二丁裏)、『六度集経』三(六十丁表)。

狐、猿、獺、兎が大学者のために食物を探し、得られなかった兎が火に飛び込み、自身を食べてもらおうとする話。

・第十一話「狼と羊との話」

『摩訶僧祇律』四(二十八丁裏)。

獸を獲るまいと決心した狼だが、羊に何度も心が揺らぎ、却ってひどい目に遭って、ようやく意が固まる話。

・第十二話「野干王城を攻むる話」

『弥沙塞部和醯五分律』三(十七丁表¹²⁾)。

狐が獣の王となったのち、野獣軍と人間軍の戦いが始まるも、獅子の雄叫びに驚いて転げ落ちた狐が、あつけなく殺される話。

・第十三話「毒蛇とも黄金とも見えしもの、話」

『大莊嚴經論』六（九十五丁裏）、『十誦律』十五（九十三丁表）。

賢人が黄金を目にして大毒蛇だと言つて去り、それを聞いた農夫が黄金を発見し贅沢な生活を送っていたところ捕まる。だが、大毒蛇の話の思い出して悔いたため赦された話。

・第十四話「啄木鳥怒つて獅子を罵る話」

『菩薩瓔珞經』十一（七十六丁裏）。

恩知らずな獅子に腹を立てた啄木鳥が、嘴で獅子の片目を潰す話。

・第十五話「孔雀と国王と国王の后と獵師との話」

『六度集經』三（五十九丁裏）。

孔雀が獵師の周到な罠にかかり、薬にするためそれを求めていた国王に献上された。呪法で病を癒す水を作り解放されたが、自身、獵師、国王が皆愚かだと言ひ捨てて去る話。

『印度の古話』

・第一話「利吒、阿利吒兄弟」
「二話とも題名がないため、私が仮に付けた」

『雜寶藏經』五（三三丁表）。

父の遺言を守らず、兄弟が財産を折半して別々に暮らし、のちに金銭のやりとりが原因で関係が険悪となる。世を憂えた兄は出家し鉢鉢をしていたところ、兄と知らずに弟が善心を起こして食料を与え

る。その後、弟は兔の変化した死人に絡みつかれるが、それが黄金像となり、善行の報いだと言われた話。

・第二話「棄老国」

『雜寶藏經』一（八丁表）。

老い衰えた父母を遠方に棄てねばならない国法があつたが、ある大臣はひそかに父を隠していた。神から国に出されたくいづもの難問に、父に相談した大臣だけが正答を出した。国王が大臣から、父を棄てずその父に尋ねていた事実を聞き、それ以降、老人を棄てることを禁じて孝行を勧めた話。

『露伴夜話』

・第一話「おろかなる鳥」

『生經』「仏説雜讚經」四十九（五十一丁表）。

雄鳥が人家近くで危険に気付きながら、なかなか離れなかつたために生け捕られる。羽をむしられ、棘の輪を首に巻かれ、よろよろになつて巢にたどり着いた。雌鳥と歌を詠んで慰め合つて、雄鳥もようやく引越すことにし、その後は夫婦睦まじく暮らした話。

・第二話「あやしき国の使者」

『生經』「仏説腹使經」二十八（四十一丁表）。

飢饉が続き、国民は慈悲深い王に食物を求めた。倉庫の食糧が底をつきそうなので、大臣が無断で、国民を王宮に入れないよう決めた。ある僧が、他国の使者を装い王に謁見して、「腹の国からやつて来た」と告げると、王は悟り、皆で分けるよう牛を千頭与えた話。

・第三話「我が物鳥」

『生経』「仏説是我所経」五（二十五丁裏）。

けちな鳥が、実の熟す時期になると、人や別の鳥に取られることを心配し、「私のものだ、取るな」と鳴く。それを聞くと、実が熟したと分かるので、人や鳥が来る。悋嗇な鳥は、自身はろくに食はず、狂ったように叫び続け、精神的に疲れ果てて死んだ話。

『五王子』

・全一話

『生経』「仏説国王五人経」二十四（三十七丁表）。

知恵、技術、美貌、勇氣、福德がそれぞれ尊いと考える五人の王子が他国に旅し、誰が勝っているかを競う。福德こそ貴いと思う王子が、出かけた先の国で禅譲されて、残り四人の王子は平伏した話。

これら教訓話の特徴は、（一）典拠と筋がほぼ同じ、（二）初版と二刊で教訓に異同が見られる、の二点である。

（一）の典拠について、露伴は『宝の蔵』で複数示しているが、いずれか一つに拠っているため、他は類話程度にすぎない。また、筋は同じだが、典拠よりも長い話がある。それは動物が登場する話に見られる傾向で、姿や行動を細かく描写することによる。子どもが想像しやすいよう仕向ける配慮だと思われる。

（二）に関しては、二刊のほうが具体的に、内容も変わる。初版『宝の蔵』末尾で、「知らる、ことはまことに能く知られたり、されどそ

れはいまだ悟りたるといふにはあらず」とまとめるように、露伴は、生きる上での知恵を子ども達が得るよう導こうとしていた。その導きをより効果的にするため、二刊で教訓の内容を修正したと思われる。以下、（一）（二）について論じる。

三、複数の典拠を持つ話

『宝の蔵』の典拠で、露伴が複数挙げているのは、第一・三・四・五・十話の計五話である。はじめに、複数の典拠を持つ話として、『宝の蔵』第一・十話を取り上げよう。まず、第一「善牙獅子と善搏虎と両舌野干との話」。善牙という獅子と善搏ぜんぱくという虎が、獲物を分け合うなど親しくしていた。それを羨んだ狐は、二匹の仲間に入ることを許されれば自分が食べられてしまうのではないかと思ひ、二匹の仲を裂いて、どちらにもいい顔をしようと企む。まず獅子のところに向かい、虎が悪口を言っていると告げ、それを悲しがる。次に虎にも、獅子が罵言を吐いていると言つて、また悲しがる。獅子と虎は、互いに怒りを覚えたまま出会う。獅子が、自分の悪口を言っていたそうだがと切り出したことで、虎が狐に騙されていたことに気づき、二匹で狐を裂いて殺す。

『十誦経』（縮刷蔵経）。以下、大蔵経には句読点を施した）過去世雪山山下有二獸、一名好毛師子、二名好牙虎、共為善知識。相親

愛念相問訊。時閉目相舐毛。是二獸恒得軟好肉噉。去是不遠、有兩舌野干。野干作是念。是好毛師子好牙虎共作善知識、相親愛念相問訊、時閉目相舐毛、恒得好軟肉噉。我当至是二獸辺作第三伴。作是念已、到虎師子所、作是言。我与汝作第三伴、汝聽我入不。師子虎言、随意。兩舌野干、得二獸殘肉噉故、身体肥大。肥已作是念。是好毛師子好牙虎。共為善知識。相親愛念相問訊、時閉目相舐毛、恒得好肉噉。或時不得必当噉我。我何不先作方便令心別離。別離已皆從我受恩。作是念已、往語師子言、汝知不。好牙虎有惡心於汝、作是言。好毛師子有所食噉、皆是我力。說是偈言、雖有好毛色、勦疾人所畏。好毛不勝我、好牙作是說。好毛師子言、云何得知。兩舌野干答言、好牙虎明日見汝時、閉目舐汝毛者当知惡相。作是語已往語虎言。汝知不。好毛師子於汝有惡心、作是言。好牙有所食噉、皆是我力。說是偈言、雖有好牙色、勦疾人所畏、好牙不勝我。好毛作是說。云何得知。答言、好毛明日見汝時、閉目舐汝毛者、当知惡相。是二知識中、虎生畏想。是故先往師子所言、汝於我生惡心、作如是言。好牙有所食噉、皆是我力。復說偈言、雖有好牙色、勦疾人所畏、好牙不勝我。汝作是說耶。師子言、誰作是語。答言、兩舌野干。好毛復問言、汝於我生惡心、作如是言。好毛有所食噉、皆是我力。復說偈言、雖有好毛色、勦疾人所畏、好毛不勝我。汝作是說耶。虎言不也。虎語師子言、汝若有是惡語者、不得共作善知識。好毛言。是兩舌野干有如此言。於意云何。不喜共我住耶。即說偈言、若信是惡人、則速別離去、常懷其愁憂、瞋恨不離心。凡為善知識、不以他語離。不信欲除者、常覓其方便。若信他別離、則為其所食。不信兩舌者、還共作和合。所懷相向說、心淨言柔軟、応作善知

識、和合如水乳。今此弊小虫、生來性自惡、一頭而兩舌。殺之則和合。爾時虎与師子。驗事實已。共捉野干破作二分。「後略」

過去世、雪山の下に二獸有り、一の名は「好毛師子」、二の名は「好牙虎」、共に善知識「友達」たり。相親しみ愛念し相問訊す「尋ねる」。時に目を閉じ相毛を舐む。この二獸、恒に軟好の肉を得て噉らふ。これを去ること遠からず、兩舌野干「狐」有り。野干、この念を作す。これ、好毛師子・好牙虎、共に善知識を作し、相親しみ愛念し、相問訊し、時に目を閉じ相毛を舐め、恒に好軟の肉を得て噉らふ。我当にこの二獸の辺りに至り、第三伴を作すべし。この念を作し已みて、虎師子の所に到りてこの言を作す。「我汝と第三伴を作さん、汝我の入るを聴くやいなや」と。師子虎言く、「随意「好きにせよ」と。兩舌野干、二獸の殘肉を得て噉ふが故に、身体肥大す。肥え已みてこの念を作す。この好毛師子・好牙虎、共に善知識たり。相親しみ愛念し相問訊し、時に目を閉じ相毛を舐め、恒に好肉を得て噉らふ。或る時得ざれば必ず当に我を噉らふべし。我何ぞ先に方便を作して心をして別離ならしめざる。別離し已みて皆な我より恩を受けん、と。この念を作し已み、往きて師子に語りて言く、「汝知るやいなや。好牙虎、悪心汝に於て有り、この言を作す。好毛師子の食噉する所有るは、皆なこれ我が力なり、と。この偈「詩」を説きて言く、好毛色有り、勦疾し「敏捷で強く」人の畏るる所なりと雖も、好毛我に勝らず、と。好牙、この説を作す」と。好毛師子言く、「云何に知るを得るか」と。兩舌野干答へて言く、「好牙虎、明日汝を見る時、目を閉じ汝の毛を

舐むれば、当に悪相「悪い兆し」なるを知るべし」と。この語を作し已み、往きて虎に語りて言く、「汝知るやいなや。好毛師子、汝に於て悪心有り、この言を作す。好牙の食噉する所有るは、皆なこれ我が力なり。この偈を説きて言く、好牙色有り、勦疾し人の畏るる所なりと雖も、好牙、我に勝らず、と。好毛、この説を作す」と。「云何に知るを得たる」と。答へて言く、「好毛、明日、汝を見る時、目を閉じ汝の毛を舐むれば、当に悪相なるを知るべし」と。この二知識中、虎、畏想「憎しみ」を生ず。この故に先に師子の所に往きて言く、「汝我に於て悪心を生じ、かくの如き言を作す。好牙の食噉する所有るは、皆なこれ我が力なり。復た偈を説きて言く、好牙色有り、勦疾し人の畏るる所なりと雖も、好牙我に勝らず、と。汝この説を作すや」と。師子言く、「誰かこの語を作す」と。答へて言く、「両舌野干なり」と。好毛、復た問ひて言く、「汝我に於て悪心を生じ、かくの如き言を作す。好毛の食噉する所有るは、皆なこれ我が力なり。復た偈を説きて言く、好毛色有り、勦疾し人の畏るる所なりと雖も、好毛、我に勝らずと。汝この説を作すや」と。虎言く、「しからざるなり」と。虎師子に語りて言く、「汝若しこの悪語有らば、共に善知識たるを得ず」と。好毛言く、「この両舌野干のかくの如き言有らば、意に於て云何せん。共に我と住するを喜ばずや」と。即ち偈を説きて言く、「若しこの悪人を信ずれば、則ち速やかに別離し去り、常にその愁憂を懐き、瞋恨「怒り憎しみ」心を離れず。凡そ善知識たる、他語を以て離れず。不信にして除かんと欲する者、常にその方便を覓む。若し他を信じ別離せば、則ちその食ふ所とならん。両舌を信ぜざれば、還た共に和合を

なさん。懐く所相向ひて説き、心淨らかに言柔軟にして、応に善知識を作し、和合して水乳の如くなるべし。今この弊小虫、生来、性自らの時、虎と師子と事実を験し已みて、共に野干を捉へ破りて二分と作す。〔後略〕

『弥沙塞部和醯五分律』（縮刷藏經）

過去世時有師子、名曰善牙。有虎名曰善抓。共作親厚。有一野狐常隨覓食。師子及虎不与共語。野狐後時作是念。今此二獸甚相愛重。我當鬪亂使各求食。所殘必多。我當得之。便至虎辺。而説偈言、善抓汝雄猛、生処色力妙。善牙説汝惡。我聞心不喜。復至師子辺、亦説偈言、善牙汝雄猛、生処色力妙。善抓説汝惡。我聞心不喜。二獸聞偈各不相喜。善牙聰明尋作是念。善抓不与我語、必是野狐鬪亂所致。後得一犢与虎。虎不肯食。於是善牙即以偈問、輟我持相与、何故而不食。親厚謂無過、反更不相喜。將無信狐言、以問吾子意、若遂懷恨情、終当成怨結。推此非有他、必是野狐讒、下賤離吾好。今當殺去之。〔後略〕

過去世の時、師子有り、名、「善牙」と曰ふ。虎有り、名、「善抓」と曰ふ。共に親厚を作す。一野狐有りて常に随ひて食を覓む。師子及び虎、与共に語らず。野狐、後時、この念を作す。今この二獸甚だ相愛重す。我當に鬪亂し各をして食を求めしむべし。残る所必ず多からん。我當にこれを得べしと。便ち虎の辺に至りて偈を説きて言く、「善抓、汝雄猛にして、生処「生まれ」、色力「見た目」妙たり。善牙、汝の

悪を説く。我聞きて心喜ばず」と。復た師子の辺に至りて、亦た偈を説きて言く、「善牙、汝雄猛にして、生処色力妙たり。善抓、汝の悪を説く、我聞きて心喜ばず」と。二獸、偈を聞きて各相喜ばず。善牙、聰明にして、尋ぎてこの念を作す。善抓の我と語らずは、必ずこれ野狐の鬪乱し致す所とならん、と。後に一犢を得て虎に与ふ。虎、食ふを肯んぜず。ここに於て善牙即ち偈を以て問ふ、「我を輟め「付き合いをやめ」、持して相与ふに、何故而も食はず。親厚過ぐる無しと謂ふに、反りて更に相喜ばず。將に狐の言を信するなかれ、以て吾子「あなた」の意を問てんとす。若し遂に恨情を懐かば、終に當に怨結を成すべし。これを推し、他有るにあらず、必ずこれ野狐の讒なり。下賤にして吾が好「友」を離す。今當にこれを殺し去るべし」と。「後略」

『宝の蔵』第一話は、『十誦経』と同じ筋である。『弥沙塞部和醯五分律』も似ているが、類話に過ぎない。「有一野狐常随覓食。師子及虎不与共語」、すなわち獅子と虎が、狐と話さず、その請いを無視していることは、『宝の蔵』と反対であり、また、「善牙「略」後得一犢与虎。虎不肯食」の件も見られない。末尾の「今当殺去之」も、『十誦経』の「共捉野干破作二分」に比べて具体性に欠く。

なお、露伴は獅子の名を「善牙」、虎の名を「善搏」とするが、挙げた典拠に善搏は出てこない。善牙と善搏の名は、『諸経要集』巻十五の「古昔有両悪獸為伴。一名善牙師子。二名善搏虎。昼夜伺捕衆鹿。時有一野干逐彼二獸後。食其残肉以自全命」で始まる部分には見られる。しかし、露伴がなぜ善牙と善搏の名にしたのか分からない。

次に、第十「兎他の善を助くるに勇猛なる話」。山に尊い学者が暮らし、狐・猿・獺・兎はそれをうれしく思っていた。ある時、山の食糧が乏しくなったので、学者は山を出ざるを得なくなる。動物たちは、学者に山で修行を継続してほしい思いから、猿は「甘い果」・狐は「飯粃」・獺は「大きな魚」を届けた。ただ兎だけが何も獲られなかった。悩んだ拳句、兎は身を献げる決心をして火中に飛び入る。

『旧雜譬喻経』（『縮刷蔵経』）

昔有梵志年百二十。少小不妻娶、無淫泆之情。処深山無人之处。以茅為廬蓬蒿為席、以水果蔬為食飯、不積財宝。国王娉之不往。意静処無為。於山中数千余歳、日与禽獸相娛樂。有四獸、一名狐、二名獺、三者獺、四者兎。此四獸日於道人所聽経説戒。如是積久。食諸果蔬皆悉訖尽。後道人意欲使徙去。此四獸大愁憂不樂、共議言、我曹各行求索供養道人。獺猴去至他山中、取甘果来以上道人、願心莫去。狐亦復行化作人、求食得一囊飯粃来、以上道人、可給一月糧、願止留。獺亦復入水取大魚来、以上道人、給一月糧、願莫去也。兎自思念、我当用何等供養道人耶。自念、当持身供養耳。便行取樵以然火作炭、往白道人言、今我为兎最小薄、能請入火中作炙、以身上道人、可給一日糧、兎便自投火中。火為不然。道人見兎感其仁義、傷哀之則自止留。〔後略〕

昔、梵志有りて年百二十なり。少小、妻娶せず。淫泆の情無し。深山の人無きの処に処す。茅を以て廬と為し、蓬蒿は席と為し、水果の蔬を以て食飯と為す。財宝を積まず。国王、之を娉ぶも往かず。

意静にして、無為に処す。山中に於て数千余りの歳、日禽獸と相娯樂す。四獸有りて、一名は狐、二名は獼猴、三は獺、四は兔なり。此の四獸、日道人の所に於て経・説戒を聴く。かくの如く積むこと久し。諸果蔬を食し、皆悉く訖り尽く。後に道人の意、徙り去らしめんと欲す。此の四獸、大いに愁憂し、樂しからず。共に譏言し、「我が曹「仲間」、各行きて求索し、道人に供養せよ」と。獼猴去りて他の山中に至り、甘果を取り来たり以て道人に上る。願はくは、心に去ること莫らん、と。狐亦復行き、化して人と作り、食を求め一囊の飯麩を得来る。以て道人に上り、一月の糧を給ふべし。願はくは止留せよと。獺亦復水に入りて大魚を取り来る。以て道人に上り、一月の糧を給ふ。願はくは去ることなかれと。兔自ら思念し、我当に何等を用いて道人に供養すべきや。自ら念ひ、当に身を持って供養すべきのみと。便ち行きて樵を取り、以て火を然やして炭と作す。往きて道人に白して言く、「今我れ兔の最も小薄たり。能く請ふ、火に入りて炙「炙り肉」と作し、身を以て道人に上り、一日の糧を給ふべきことを」と。兔便ち自ら火中に投ず。火、為に然えず。道人、兔を見てその仁義を感じ、これを傷哀し則ち自ら止留す。〔後略〕

四種の動物である狐・獼猴・獺・兔と、兔以外が獲得してきた糧、すなわち獼猴の「甘果」・狐の「飯麩」・獺の「大魚」が一致し、筋も『宝の蔵』とほぼ同じである。一方、露伴が参照したと記す他の二つは、類話程度と思われる。まず『生経』には兔のみが登場し、火の中に飛び込んだのち、道人が助けに行くが、兔は死んで天界に生まれかわる。

「便自举身、投於火中。火大熾盛、適墮火中、道人欲救。尋已命過。命過之後、生兜術天」(便ち自ら身を挙げ、火中に投ず。火、大いに熾盛にして、適ま火中に墮ち、道人救わんと欲す。尋ぎて已に命過ぐ。命過ぐるの後、兜術天に生ず)とある。『雜宝蔵経』でも、兔しか出てこない。かつ、仙人は兔を食べてしまふ。「即大然火投身著中。仙人見已、作是思惟、此兔慈仁、我之善伴、為我食故、能捨身命、实是難事。時彼仙人、生大苦惱、即取食之」(即ち大いに火を然やし、身を投じて中に著す「居る」。仙人見已みて、この思惟を作す。この兔は慈仁にして、私の善き伴なり。我が食と為らんが故に、能く身命を捨つ。実にこれ難事なり。時に彼の仙人、大苦惱を生ずるも、即ち取りて之を食す)。

四、典拠よりも長い話

露伴は、かつて妹たちにしていた仏典に関する話を娘にも聞かせている。幸田文「宝の蔵」(『露伴全集』「月報」五、昭和二十四年十月岩波書店)が、「宝の蔵」や「宝の山」の話もしてくれたこと無論である。獅子と虎と狐、狐と老獅子、王城を攻める狐、兔身を焼いて善を助ける話などが私のお好み番組で、せがんで何度も何度も話しても「らつた」と語るように、動物が登場する話が多い。『宝の蔵』から『五王子』全二十一話のうち、十六話は動物が主人公である。人間しか登場しないのは、『宝の蔵』第三十三話、『印度の古話』全二話、『五王子』の計五話のみ。

動物が出てくる話は、動物の姿や行動を細かく描写するためか、概して典拠よりも長くなる傾向が見られる。それは、子どもが想像しやすいよう仕向ける配慮ゆえであろう。「露伴翁夜話」⁽¹³⁾で、「道徳的なものになると打消のものが多くなる。「略」「すべからず」でなしに、また「すべし」といふよりも、ただ具体的にものを現はすといふやうにした方が子供が本当に誘はれると思ひます」と語るように、露伴は子どもが自然と感じられるもので導こうとしていた。

以下、三話読むことにしたい。前二者は動物が主人公、後者は人間のみが登場する話である。まず、『宝の蔵』第九「梟と烏との話」。梟と烏が憎しみ合つて戦うが、一羽の烏の智慧により、梟が殲滅される。

『雜宝蔵経』「烏梟報怨縁」(『黄檗版大蔵経』)

昔有烏梟、共相怨憎。烏待昼日、知梟無見、蹋殺群梟、噉食其肉。梟便於夜、知烏眼闇、復啄群烏、開穿其腹、亦復噉食。畏晝畏夜、無有竟已。時群烏中、有一智烏。語群烏言、已為怨憎、不可求解。終相誅滅、勢不兩全。宜作方便殄覆諸梟。然後我等可得歡樂。若其不爾、終為所敗。衆烏答言、如汝所說、当作何方、得滅讐賊。智烏答言、爾等衆烏、但龕啄我、拔我毛羽、啄破我頭。我當設計、要令殄覆。即如其言。(日+焦)悴形容、向梟穴外、而自悲鳴。梟聞声已便出問言、爾今何故、破傷頭腦、毛羽毀落、来至我所、悲声極苦、欲何所說。烏語梟言、衆烏讐我、不得生活。故来相投、以避怨惡。時梟憐愍、欲存養畜。衆梟皆言、此是怨家、不可親近、何緣養畜、以長怨敵。時梟答言、今以困苦、来見投造。一身孤單、竟何能為。遂便畜養、恒与殘肉。日

月転久。毛羽平復。烏許歡喜、微作方計。銜乾樹枝并諸草木、著梟穴中、似如報恩。梟語烏言、何用是為。烏即答言、孔穴之中、純是冷石。用此草木、以御風寒。梟以為爾、默然不答。而烏於是、即求守穴、詐給使令、用報恩養。時会暴雪、寒氣猛盛。衆梟率爾来集孔中。烏得其便、尋生歡喜。銜牧牛人火用燒梟孔。衆梟一時、於孔焚滅。「後略」

昔、烏・梟有り、共に相怨憎す。烏、昼日を待ち、梟の見る無きを知り、群梟を蹋み殺し、其の肉を噉ひ食ふ。梟便ち夜に於て、烏の眼闇きを知り、復た群烏を啄み、其の腹を開き穿ち、亦復た噉ひ食ふ。晝を畏れ夜を畏れ、竟に已むこと有る無し。時に群烏の中に一智烏有り。群烏に語りて言く、「已に怨憎の為に、解くる「和解」を求むべからず。終に相誅滅し、勢ひ両ながら全からず。宜しく方便を作し諸梟を殄し覆ふべし。然る後、我等歡樂を得べし。若し爾らざれば、終に敗るる所とならん」と。衆烏答へて言く、「汝の説く所の如く、当に何れの方を作し、讐賊を滅すを得べきや」と。智烏答へて言く、「爾等衆烏、但だ我を龕啄し「つつき倒し」、我が毛羽を抜き、我が頭を啄き破れ。我、当に計を設くべし。要ず殄ぼし覆はせ「滅ぼさせ」よ」と。即ち其の言の如くす。(日+焦)悴「憔悴の意と推定⁽¹⁴⁾」の形容にて、梟の穴の外に向ひて自ら悲鳴す。梟、声を聞き已に便ち出で問ひて言く、「爾、今何故に頭腦を破傷し、毛羽毀落して、我が所に来至し、悲しき声にて極めて苦しき、何れの所をか説かんと欲するや」と。烏、梟に語りて言く、「衆烏、我に讐し、生活するを得ず。故に來りて相投じ、以て怨惡を避く」と。時に梟、憐愍し、存し「留め」養畜せんと欲す。

衆梟皆言く、「此れは是れ怨家なり、親しく近づくべからず。何に縁りて養畜し、以て怨敵を長ずるや」と。時に梟、答へて言く、「今困苦を以て来り、投ずるに造せらる。一身孤单なり。竟に何ぞ能く為さんや」と。遂に便ち畜養し、恒に残肉を与ふ。日月転た久しく、毛羽平復す。烏詐りて欣喜し、微に方計を作す。乾樹の枝並びに諸草木を窺みて、梟穴の中に著き、恩を報ずるが如きに似たり。梟、烏に語りて言く、「何ぞ用て是れを為すや」と。烏即ち答へて言く、「孔穴の中、純らはれ冷石なり。此の草木を用ひ、以て風寒を御ぐ」と。梟以て爾りと為し、黙然として答へず。而して烏、是に於て即ち穴を守るを求め、詐りて使令に給し「召使となり」、用て恩養に報はんとす。時に會、暴雪、寒氣猛く盛んなり。衆梟、率爾に來りて孔中に集まる。烏、其の便を得、尋いで欣喜を生じ、牧牛の人の火を銜み、用て梟孔を焼く。衆梟一時に孔に於て焚滅す。〔後略〕

『雑玉藏経』冒頭に、烏と梟が互いに弱点のある時間帯を狙つて襲撃することが書かれているが、『宝の蔵』の描写はかなり具体的である。たとえば、「彼かあ〜と鳴く声の喧し彼墨染の羽の醜しと梟は烏を罵れば、烏はまた梟のぎろりとしたる大きな眼の悪気なり、毛の生へたる足の厭はしと梟を罵り」、「烏は」鉄槌のやうなる嘴をもて思ふさまに腹を啄き頭を啄き、「梟は」無二無三に鋭き爪もて掻き裂き鉤の如き嘴もて啄き殺す」などである。

また、梟が愚な鳥であると強調する箇所は典拠に見られない。『宝の蔵』には、「元來梟は愚なる鳥にて実に他の鳥の巢をば常に羨みな

がら、夜は食を索むるに忙がはしくして巢を作ることを為さず、晝天になりて眼の視難くなる頃は巢を造らざりしを常に悔ゆる」とある。一方で、典拠の、烏を留め置こうとする一羽の梟に対し、他の梟たちが諫めても聞き入れられない箇所については採用していない。これは、愚かな梟にはそうした知恵もないということだろう。

末尾も『宝の蔵』の方が詳細である。「衆梟一時、於孔焚滅」という典拠に対し、「一時にばつと燃えあがりけり、梟共は驚き騒げど昼の事なる上に火の光り盛んなれば、空しく大きな眼を張るのみにて逃ぐべき方も視出し得ず、其間に火炎は羽を焦し翼を焼けば益々呆れ、鳴き悲しむ中、早くも黒焦げとなりけるとぞ」と描かれる。

次は、『露伴夜話』第三話「我が物鳥」。この話は、悋嗇を戒める話である。露伴は典拠の「我所鳥」を「わがもの鳥」と名づけ、その愚かしいケチぶりを繰り返して述べているため、典拠に比べかなり長い。

『生経』「仏説是我所経」(縮刷藏経)

乃往過去無數世時、有大香山、生無央數華菱諸葉、及胡椒樹。華菱樹上、時有一鳥、名曰我所。止頓其中。假使春月葉果熟時、人皆採取、服食療疾。時我所鳥、喚呼悲鳴、此果我所、汝等勿取、吾心不欲令人採之。雖叫喚呼、衆人統取、不聽其声。彼鳥薄福。愁憂叫呼、声不休絶。緣是命過。〔後略〕

乃往「昔」、過去無數世「過去」の時、大香山有り。無央數「無數」の華菱、諸葉及び胡椒の樹を生ず。華菱の樹上、時に一鳥有り、名づ

けて「我所」と曰ふ。其の中に止頓す〔留まる〕。仮使春月、菓果の熟する時とならば、人皆な採取して服食し疾を療す。時に我所鳥、喚呼し悲鳴す、「此の果、我が所なり、汝等取る勿れ。吾が心、人をして之を採らしむるを欲せず」と。叫喚し呼ぶと雖も、衆人、続きて取り、其の声を聴かず。彼の鳥、薄福なり。愁へ憂へて叫呼し、声、休絶せず。是に縁りて命過ぐ。〔後略〕

典拠の「此果我所、汝等勿取、吾心不欲令人採之」に当たる部分を、露伴は、「我がものぞ此樹の果、我がものぞ此樹の果、拾ふな人よ、取るな鳥、拾うな人よ、取るな鳥」として、四回繰り返す。かつ、この「愚と申せばまことに愚な我が物鳥」が心配している様子を、「誰か来て此樹の果を採りはすまいか、採られてはならぬ哩、他所の鳥が来て此樹の果を啄みはすまいか、啄まれてはならぬ哩と朝暮に絶えず氣を揉みます」と、具体的に描いている。吝嗇が愚かであることを強く印象付けているものと思われる。仏典中には直接吝嗇を指す語は見当たらないが、自分の物だとわめくこの鳥の根性は、露伴にとつてケチでしかなかったのであろう。

第三は、『印度の古話』第一話で、人間が主人公の話。兄弟二人のやり取りを通して、善心により福を生じること述べる。

『雜宝藏經』（黄檗版大藏經）

有一長者。有其二子、一名利吒、二名阿利吒。恒告之言、高者亦墮常者亦尽。夫生有死、合会有離。長者得病、臨命終時、約勅兒子。慎莫

分居。譬如一糸不能繫象、多集諸糸、象不能絶。兄弟并立、亦如糸多。時彼長者、囑誡子竟、氣絶命終。以父勅故、兄弟共活、極相敬念。後為弟娶生活未幾、而此弟婦語其夫言。汝如彼奴。所以者何。錢財用度、应当人客、皆由汝兄。汝今唯得衣食而已。非奴如何。數作此語。爾時夫婦、心生變異、求兄分居。兄語弟言。汝不憶父臨終之言。猶不自改、數求分居。兄見弟意、正便与分居、一切所有、皆中半分。弟之夫婦、年少遊逸。用度奢侈。未經幾時、貧窮困匱、來從兄乞。兄於爾時、与錢十萬。得去未久、以復用尽。而更來索。如是六反、皆与十萬。至第七反、兄便責數。汝不念父臨終之言、求於分異。不能用心生活。數來索物。今更与汝十萬之錢。從今已往、不好生活、重復來索、更不与汝。得是苦語、夫婦二人、用心生活、以漸得富。兄財喪失。以漸貧窮。來從弟乞。其弟乃至不讓兄食、而作是言。謂兄常富、亦復貧也。我昔從兄、有所乞索、苦切見責。今日何故、來從我索。兄聞此已、極生憂惱、自作念言。同生兄弟、猶尚如此、況於外人。默惡生死、遂不還家。入山学道、精勤苦行、得辟支仏。其弟後亦以漸貧窮。遭世飢饉、賣薪自活。時辟支仏、入城乞食、竟無所得、空鉢還出。時賣薪人、見辟支仏空鉢出城、即以賣薪所得稗麩、而欲与之。語辟支仏言、尊者能食麤惡食不。答言、不問好惡、趣得支身。時賣薪人、即便授与。辟支仏受而食之。食訖之後、飛騰虚空、作十八變、即還所止。時賣薪人、後更取薪、道見一兔、以杖撩之。變成死人、卒起而來、抱取薪人項。彼取薪人、種種方便、欲推令去、不能得離。脱衣雇人、使挽却之、亦不得離。展転至闇、負來向家。既到家中、死人自解、墮在於地、作真金人。時賣薪人、即便截却金人之頭。頭尋還生。却其手脚、手脚還生。須臾之

間、金頭金手満其屋裏、積為大積。隣比告官、此貧窮人、屋裏自然、有此金積。王聞遣使、往覆檢之。即到屋裏、純見爛臭死人手足頭。其人自捉金頭、来以上王、便是真金。王大歡喜、此是福人。即封聚落。「後略」

一長者有り。其の二子有り、一の名は利吒、二の名は阿利吒なり。恒にこれに告げて言く、「高き者も亦た墮ち、常なる者も亦た尽く。夫れ生に死有り、合会に離有り」と。長者病を得、命終に臨む時、兒子に約し勅しむ。「慎みて分居する莫れ。譬へば、一糸象を繋ぐ能はざるも、多く諸糸を集むれば、象の絶つ能はざるが如し。兄弟並び立つ、亦た糸の多きが如し」と。時に彼の長者、子に誠を囑み竟り、氣絶え命終る。父の勅を以ての故に、兄弟共に活き、極めて相敬ひ念ふ。後に、弟の為に娶り生活すること未だ幾ばくならずして、この弟の婦、その夫に語りて言く、「汝、彼の奴「しもべ」の如し。所以は何ぞや。錢財の用度、応に人客「侵略者」に当るべく、皆汝の兄に由る。汝今唯だ衣食を得るのみ。奴に非ず如何ん」と。数この語を作す。爾の時、夫婦、心に変異を生じ、兄に分居を求む。兄、弟に語りて言く、「汝、父の臨終の言を憶はずや」と。猶ほ自ら改めず、数分居を求む。兄、弟の意を見、正に便ち与に分居し、一切の所有、皆半分に分る。弟の夫婦、年少く遊逸にして、用度奢侈なり。未だ幾くも経ぬ時、貧窮し困置し「無一文になり」、来りて兄より乞ふ。兄、爾の時に錢十萬を与ふ。得て去ること未だ久しからずして、以て復た用ひ尽くす。而して更に来り索む。かくの如くすること六反、皆十萬を与ふ。第七反に

至り、兄便ち責數す「責める」。「汝父の臨終の言を念はず、分異「別々になること」を求む。用心して生活する能はず、數来りて物を索む。今更に汝に十萬の錢を与ふ。今、已往「過去」より、生活を好くせずば、重ねて復た来り索むるも、更に汝に与へず」と。この苦語を得、夫婦二人、用心して生活し、以て漸く富を得。兄、財喪失し、以て漸く貧窮す。来りて弟より乞ふ。その弟、乃ち兄に食を譲らず、この言を作すに至る。兄、常に富むと謂ふも、亦復貧なり。我昔、兄より乞ひ索むる所有るも、苦切し責めらる。今日何の故にか来りて我より索むる」と。兄、これを聞き已み、極めて憂惱を生じ、自ら念言を作す。同生の兄弟すら、猶尚かくの如し、況んや外の人に於てをやと。生死を厭惡し「嫌惡し」、遂に家に還らず。山に入りて道を学ぶ。精勤苦行し、辟支仏「自分で悟りを開く仏」を得たり。その弟、後に亦た以て漸く貧窮す。世の飢饉に遭ひ、薪を売りにて自活す。時に辟支仏、城に入りて食を乞ふも、竟に得る所無く、空鉢にて還り出づ。時に薪を売る人、辟支仏の空鉢にて城を出づるを見て、即ち薪を賣りて得る所の稗麴「麦」を以て、これに与へんと欲す。辟支仏に語りて言く、「尊者能く麤惡「粗惡」の食を以てするや不や」と。答へて言く、「好惡を問はず、趣きて身を支ふるを得ん」と。時に薪を売る人、即便ち授け与ふ。辟支仏、受けてこれを食す。食ひ訖るの後、虚空に飛騰し「飛び上がり」、十八變を作し、即ち所止「住まい」に還る。時に薪を売る人、後に更に薪を取り、道に一兔を見て、杖を以てこれを擽る。變じて死人と為り、卒に起き来りて、薪の人の項を抱き取る。彼の薪を取る人、種種に方便し、推して去らしめんと欲するも、離るるを得

る能はず。衣を脱ぎ人を雇ひ、これを挽き却かしむるも、亦た離るるを得ず。展転して闇に至り、負ひ来り家に向ふ。既に家の中に到り、死人自ら解け、墮ちて地に在り、真金の人と作る。時に薪を売る人、即便ち金の人の頭を截り却く。頭、尋ぎて還た生ず。その手脚を却すも、手脚還た生ず。須臾の間、金頭、金手、その屋裏に満ち、積みて大積「高く重ねること」を為す。隣比「近所」、官に告ぐ、「この貧窮の人、屋裏に自然、この金積有り」と。王聞きて使ひを遣はし、往きてこれを覆検「調査」せしむ。即ち屋裏に到り、純ら爛れ臭き死人の手足頭を見る。その人、自ら金頭を捉へ、来りて以て王に上る。「便ちこれ真金なり」と。王、大きに歓喜し、「これは、これ福人なり」と。即ち聚落に封ず。〔後略〕

動物が主人公の場合と異なり、本作の場合、細かな描写が見られないため、話の長さは典拠とほぼ変わらない。人間のみが登場する四話(『宝の蔵』第三十三話、『印度の古話』第二話、『五王子』) に関しても、同様の傾向が見られる。たとえば、『宝の蔵』第三話「毒箭に中りたる愚人の話」は、典拠の煩雑な記述を簡潔にしたり、『五王子』では末尾を変えて、善を心がけよという教訓を強調したりする工夫が見られるが、独自性は極めて薄いと云える。

『宝の蔵』「よみはじめ」で、語り手の翁が子どもたちに、「問ふて知り玉ひたらば、かならず考へて悟るといふことを忘れ玉ふな、考ふるといふことは問ふといふことよりも更によきものを諸君に得さすべし」、「よく聴き玉へよ、よく考へ玉へよ、考へ玉ふことの報酬として

は諸君何をか得たまふべき、即ち宝を得たまふならん歟」という。また、三版『宝の蔵』「又の日の会」でも、子どもたちが、「物語の意を考へて悟るといふことは、かならず忘れで務め申べければ」と述べる。露伴は譬喩話によって、子供たちに「悟り」、すなわちに生きる上で知恵を授けようとしていたと言える。そのために、仏典から譬喩話を選び、具体的かつ詳細に描いて仕立てたのである。それが、動物が登場する話において顕著に見られた。

五、『宝の蔵』における教訓の異同

『宝の蔵』の巻末では、語り手の翁と子供たちが全十五話について語り合い、教訓をまとめる。第一章で述べたように、初版と再・三版はこの部分に大きな異同が見られる。ほぼ同じなのは、第五・七・十一・十三の計四話にすぎない。なお、『印度の古話』『露伴夜話』の教訓は各話の末尾、『五王子』は巻末に述べられる。

『宝の蔵』の異同についていえば、たとえば初版「よみをはり」が、知らる、ことはまことに能く知られたり、されどそれはいまだ悟りたるといふにはあらず、頓て実際に臨みて今の考へを出したまふことあらば初めて宝の蔵より佳きものを得玉ふこと必定あるべし、ともかくも伶俐諸君なれば能くも皆談話の神を知り得玉ひ、翁も嬉しくおほゆるなり

であるのに対し、再版「よみじまひ」では、
実に諸君は能く聞きて又能く考へたまひたり。諸君の考へ得たま

ひとしところ皆物語の真の意なり。「略」諸君はまことに能く味はふことを知り居玉へば、翁も物語り聞かせまゐらするに張合ひありとなつてゐる。初版では、まだ悟りに至らず課題が残ることを指摘する厳しい翁であつたが、再版ではよく考へたと褒める優しい翁なのである。

以下、末尾の教訓に大きな異同のある話を『宝の蔵』から二つ読むことにしよう。第一に、第十二「野干王城を攻むる話」。幸田文が、「狐王城を攻むる話では、両軍が鬨の声をあげるところがおもしろい」（前掲『宝の蔵』）という。露伴はこの話をするたびに、獅子が鬨の声をあげる場面で、「自ら大口を明き齒を剥きだし、ぐわああと全くの咆哮をして見せた」（同）そうである。

『弥沙塞部和醯五分律』（縮刷蔵経）

乃往古昔有一摩納。在山窟中誦利利書。有一野狐住其左右專聽誦書。心有所解作是念。如我解此書語、足作諸獸中王。作是念已、便起遊行逢一羸瘦野狐。便欲殺之。彼言何故殺我。答言我是獸王。汝不伏我。是以相殺。彼言、願莫殺我。我當隨從。於是二狐便共遊行。復逢一狐。又欲殺之。問答如上、亦言隨從。如是展轉伏一切狐。便以群狐伏一切象、復以衆象伏一切虎、復以衆虎伏一切獅子。遂便權得作獸中王。既作王已復作是念。我今為獸王、不応以獸為婦。便乘白象、帥諸群獸不可称数、圍迦夷城數百千匝。王遣使問、汝諸群獸、何故如是。野狐答言、我是獸王、応取汝女。与我者善。若不与我當滅汝国。還白如此。王集群臣共議。唯除一臣、皆云応与。所以者何。国之所恃唯頼象馬。

我有象馬彼有師子。象馬聞氣惶怖伏地。戰必不如。為獸所滅。何惜一女而喪一國。時一大臣聰叡遠略、白王言、臣觀古今。未曾聞見人王之女与下賤獸。臣雖弱昧、要殺此狐、使諸群獸各各散走。王即問言、計將焉出。大臣答言、王但遣使剋期、戰日先當從彼求索一願。願令師子先戰後吼。彼謂吾畏、必令師子先吼後戰。王至戰日、當勅城内皆令塞耳。王用其語。遣使剋期并求上願。至于戰日復遣信求、然後出軍。軍鋒欲交、野狐果令師子先吼。野狐聞之心破七分、便於象上墜落于地。於是群獸一時散走。〔後略〕

乃ち往古の昔に一摩納「若い信者」有り。山窟中に在て利利「王族」の書を誦む。一野狐有り、その左右に住まり専ら書を誦むを聴く。心に解する所有りてこの念を作す。如し我れこの書の語を解さば、諸獸中の王と為るに足らんと。この念を作し已みて、便ち起ちて遊行し一羸瘦の野狐に逢ふ。便ちこれを殺さんと欲す。彼言く、「何故に我を殺さんや」と。答へて言く、「我れこれ獸王なり。汝我に伏さず。こを以て相殺さんとす」と。彼言く、「願はくは我を殺すこと莫れ。我當に隨從すべし」と。ここに於て二狐便ち共に遊行す。復た一狐に逢ふ。又これを殺さんと欲す。問答すること上の如く、亦た言く「隨從す」と。かくの如く展轉し一切の狐を伏す。便ち群狐を以て一切の象を伏し、復た衆象を以て一切の虎を伏し、復た衆虎を以て一切の師子を伏す。遂に便ち權に獸中の王と為るを得たり。既に王と為り已みて復たこの念を作す。「我今獸の王なり、應に獸を以て婦と為す〔獸を娶る〕べからず」と。便ち白象に乗り、諸群獸の称数す〔数え上げ

る」べからざるを帥もりて、迦夷城を囲むこと数百千匝まわ。王、使つかひを遣はし問ふ、「汝諸群獸、何の故にかくの如くなるや」と。野狐答へて言く、「我れこれ獸王なり。応に汝が女を取るべし。我に与へば善し。若し我に与へずんば、我れ當に汝の國を滅すべし」と。還りて白まうすことかくの如し。王、群臣を集め共に議す。唯だ一臣を除いて、皆云く「応に与ふべし。所以は何ぞや。國の恃む所、唯だ象馬に頼む。我に象馬有るも、彼に師子有り。象馬、氣「状況」を聞きて惶怖し地に伏さん。戰、必ず如かず、獸の滅する所と為らん。何ぞ一女を惜しみて一國を喪ふや」と。時に一大臣聡叡にして、遠略を以て、王に白して言く、「臣、古今を觀るに、未だ曾て人王の女を下賤の獸に与ふるを聞見せず。臣、弱く味くろしと雖も、要かならずこの狐を殺し、諸群獸の各々をして散走せしめん」と。王、即ち問ひて言く、「計將まさに焉こゝに出でんとするか」と。大臣答へて言く、「王、但だ使つかひを遣はし剋期し「期日を約し」、戰日、先に當に彼より一願を求索せしむ「求めさせる」べし。願はくは、師子をして先に戰ひ後に吼えしめよ。彼は吾を畏ると謂おもひ、必ず師子をして先に吼えしめ後に戰はん。王、戰日に至らば、當に城内に勅し皆耳を塞がしむべし」と。王、その語を用ひ、使つかひを遣はし剋期し、並びに上の願ひを求む。戰日に至りて、復た信「書簡」を遣はし求め、然る後に軍を出す。軍鋒交へんと欲するに、野狐、果して師子をして先に吼えしむ。野狐これを聞き、心破れて七分し、便ち象上より地に墜落す。ここに於て群獸一時に散走す。

初版「よみをはり」の教訓は、「僥倖まぐれさいはひを得て慢心おごりを生ずるものは足

下より獅子の声のやうなる恐ろしき者の、起りたつに遭ひて太甚はなはだしき醜態ぶいさまをあらはし人の笑ひとなるといふ譬喩へいごなり」。對して再版「よみじまひ」は、「身の程知らぬ望みを起すことの愚なることと、實まことの力無くして多くの人の首かしらとなることの危きこととを示せるならん」である。

初版は、驕ればいつかは醜態をさらけ出して笑ひものになると諫め、痛烈である。しかし再版は、「身の程知らぬ望み」などと具体化し、わかりやすく述べている（三版も再版に同じ）。本章冒頭でも異同を確認したように、再版は言い回しが軟化していると見えよう。

典拠と初版を比較すると、「於是群獸一時散走」で終わる典拠に對し、『宝の藏』では、「諸の獸類共此態を視て、自己おのれが王の頼みにならぬを悟り、各自狐をふり捨て、棲所すまひかへ走り還りける、狐は腰の骨を打ちて痛さに苦しみ居るところを、這業このはかもの奮めと國王の臣下に忽ち踏み殺されける」と、狐がぶざまに転げ落ちたところを踏み殺されるよう、誇張している。初版「よみをはり」の教訓、「僥倖まぐれさいはひを得て慢心おごりを生ずるものは「略」太甚はなはだしだき醜態ぶいさまをあらはし人の笑ひとなるといふ譬喩へいごなり」は、そのままの結末といえよう。

続いて第十四話「啄木鳥怒つて獅子を罵る話」。これは、恩知らずな獅子が啄木鳥に片目を潰される話である。

『菩薩瓔珞經』

時師子王、晨朝跣立六処不動、奮迅身体便大雷吼。走獸伏住飛者墮落。

然後乃趣曠野山沢、案行局界求覓群獸。逢一象王殺而食之。体骨鯁咽死而復穌。時有木雀在師子前、求覓軟虫取而食之。師子張口告木雀曰、与吾挽此骨、却後若得食当相報恩。木雀聞之、入口尽力。拔骨乃得去之。時師子王後日求食大殺群獸。木雀在側少多求恩師子不報。仏告目連、時師子王、以此偈報木雀曰、吾為師子王、以殺為家業、啖肉飲其血、以此為常膳、汝既不自量、脱吾牙齒難、還得出吾口、此恩何可忘。爾時木雀。復以此偈報師子曰、我雖是小鳥、誠応不惜死、但王不念恩、自負言誓重、若能小寛弘、少多見惠者、没命終不恨、不敢有譏論。爾時師子王、竟不報恩捨之而去。木雀自念、吾恩極重反更輕賤。今当追後要伺師子。便不報怨者終不行世。在在処処終不相離。時師子王復殺群獸恣意食之、飽便睡眠無所畏懼。時彼木雀、飛趣師子当立額上、尽其力勢啄一眼壞。師子驚起左右顧視。不見余獸唯見木雀独在樹上。時師子王語木雀曰、汝今何為乃壞吾目。時彼木雀以偈報師子王曰、重恩不知報、反更生害心、今留汝一目、此恩何可忘、汝雖獸中王、所行無反復、從是各自休、莫復作縁対。〔後略〕

時に師子王、晨朝「朝八時頃」に峙立し六処「目、耳、鼻、舌、身、意」動ぜず、身体を奮迅し便ち大雷吼す。走る獸は伏し住まり、飛ぶ者は墮落す。然る後乃ち、曠野山沢に趣き、局界「近くの地」を案行「巡行」し群獸を求覓す「求める」。一象王に逢ひ、殺してこれを食ふ。体骨鯁咽し「骨が喉にささり」、死して復た穌す。時に木雀有りて師子の前に在り、軟虫を求覓し、取りてこれを食ふ。師子口を張り、木雀に告げて曰く、「吾とこの骨を挽け。却後「その後」若し

食を得ば、当に相恩に報はん」と。木雀これを聞き、口に入りて力を尽くし、骨を抜き乃ちこれを去ることを得。時に師子王、後日、食を求め大きに群獸を殺す。木雀側に在りて少多「やや多く」の恩を求むるも、師子報いず。仏、目連「弟子の名」に告ぐ、「時に師子王、この偈を以て木雀に報いて曰く、吾、師子王たり。殺を以て家業と為し、肉を啖ひ其の血を飲む。これを以て常膳と為す。汝既に自ら量らず、吾が牙齒の難を脱し、還りて吾が口を出づるを得たり。この恩何ぞ忘るべけんや」と。爾の時木雀、復たこの偈を以て師子に報へて曰く、「我れこれ小鳥と雖も、誠に応に死を惜しまず。但だ王、恩を念せず、自ら言誓の重きを負ふ。若し能く小しく寛弘にして、少多恵まば、命を没するも終に恨まず、敢えて譏論「議論」有らず」と。爾の時師子王、竟に恩に報いず、これを捨てて去る。木雀自ら念ふ、吾が恩極めて重きに反つて更に輕賤さる「輕んじられる」。今、当に後を追ひ要す師子を伺ふべし、便ち怨を報ぜずんば終に行世「処世」せずと。在在処処、終に相離れず。時に師子王、復た群獸を殺し、意を恣にこれを食ひ、飽きて便ち睡眠し、畏懼する所無し。時に彼の木雀、飛びて師子に趣き、当に額上に立つべく、その力勢を尽くして一眼を啄み壞る。師子、驚き起きて左右顧視す。余獸を見ず、唯だ木雀の独り樹上に在るを見る。時に師子王、木雀に語りて曰く、「汝今何為ぞ乃ち吾が目を壞る」と。時に彼の木雀、偈を以て師子王に報いて曰く、「重恩、報を知らず。反つて更に害心を生ず。今汝に一目を留む。この恩何ぞ忘るべけんや。汝、獸中の王と雖も、所行反復無し。これより各自ら休み、復た縁対「因縁の対」を作すこと莫かれ」と。〔後略〕

教訓の異同を見よう。初版は、「小なる者をも侮る可からず、罵詈は罵詈を招き無法の言は無法の言を招くといふ譬喩なり」。再版は、「其意は、強きものも弱きものを侮るべからず、大なるものも小なるものを軽んずべからず、罵詈は、必ず罵詈を招き、暴言は必ず暴言を来すといふことの譬喩なるべし」。「我等は獅子が行ひを憎みて、啄木鳥の勇を愛するなり」、「我等は啄木鳥が恐ろしき獅子の口の中に入りて其喉に立ちたる骨を抜きて遣りたる其義氣を高しとして、眠れる獅子の眼を啄き破りたる其復讐をば悦ばず。ひそかに啄木鳥が胸の狭くして心の寛からぬを悲しむなり」とある。このように、啄木鳥に対する評価が大幅に増えている。

第三章で述べた『宝の蔵』第一「善牙獅子と善搏虎と両舌野干との話」も同様に教訓が増えている。初版は、「悪き智慧より巧み出せし両舌のいたづらに殃を惹くのみなることの譬喩なり」。再版は、「諛詐の益無きことを説きたる譬喩なるべし。両舌野干の如きは智慧無きにはあらねども却つて智慧無きものよりも愚なるめに会ひたりといふべし。我等は獅子の如く虎の如くに独立して且相助けて世を經べし。野干の如き卑しき心を有ちて誠無き振舞を為さんことは、慚づくべし厭ふべきことなりと思ふなり」。「物語の主なる意は其処にあるべし。さて又其傍には、漫に争鬪を為さぬといふことは賢き事なりとの教の意も籠れるにはあらずや。我等は物語を聞きながら、獅子と虎との智慧深くして妄りに鬪ひを開かざりしには感服したり」と、詳細である。

一方、教訓が削られていく話もある。たとえば、第四章で述べた、『宝の蔵』第九「梟と鳥との話」の場合、初版では「梟より弱き鳥も非常

の勇氣と智慧と忍耐と同族を思ふ熱心とをもつては唯一羽にて敵を殄ぼし尽すほどの大事を成し遂げ得るといふ事なるべし、我等男兒は時として彼鳥のやうなる覚悟あれと云ふことならむ」とあったが、再版では「怨恨は解くべし結ぶべからず、怨恨を結びて解かずんば強き者も遂に亡ぶる日あらん、といふことを示したるならん」と簡単である。勇敢な鳥の覚悟を男兒に奨励している部分を省き、怨みを捨てて相手を許すべきことが述べられる。

同様に、第三章で読んだ『宝の蔵』第十一「兎他の善を助くるに勇猛なる話」も教訓が削られる。初版「我が善を為すに身を惜まざるは勿論の事ながら他の善を助くるにもまた勇猛ならば其功德は大なるものなりといふ意ならん」、「特に妾には身に染みて覚えらる、彼尊き兎の心掛けの話は分けて女のためなるべし、行末ともに強き心を持ちて他の善をば助くべし」が、再版では「自己の身を捨つるは悲しきことの限りなれば、もとより好ましきことにはあらねど、百計尽きて如何ともすること叶はぬ時には、自己が身を捨てても自己が志は成し遂ぐべし、といふ教訓の意を含めるなるべし」、「且は善事のためには、他の上の事にもせよ力を添ふべし、といふ意も籠れるなるべし」とある。女性は身を捨てても他人を助けるべきだという部分が削除された上、身を捨てること自体が「好ましきことにはあらねど」とされている。

結び

露伴は、『宝の蔵』が「割に用ゐられてゐないですな、みんな比喩譚だから。猿の話、兎の話、狐の話といふやうに」(前掲『露伴翁夜話』)と述べる。黄檗版や縮刷版の『大藏経』を読み込んでいた露伴は、その博識によつてこうした「比喩譚」を仏典から選び、子供向けの教訓話を書いた。しかし、『宝の蔵』は「子供のためのものに書いた訳なんです、やはり自分勝手なものを書いて、少しむつかしいなんていふ批評を受けちまつたんですがね。しかし、どうも評の方が当つてゐるのは仕方がない」(同)とも語っている。

『般若心経第二義注』(前掲)で、「諸経をおぼえたりとて少しも善人にはならず」(「おぼえると悟るとは慥たかに相違あり。手斧の使ひ方ばかりにても、足の親指を一度切らねば悟れぬとは大工の名言」)、「悟らねば何の役にか立たむ」と述べ、前述のように『宝の蔵』初版「よみをはり」で「知らるゝことはまことに能く知られたり、されどそれはいまだ悟りたるといふにはあらず」と述べることから、露伴が、譬喩話によつて子供たちに「悟り」、すなわち生きるための知恵を与えようとしていたと考えられる。露伴は、仏典の譬喩談に取材し、それをわかりやすく具体的に話すことで、少年を導こうとした。仏典は格好の材料だったのである。

注

- (1) 今善作『東開タルマ和尚と幸田露伴』(昭和四十八年十二月非売品)。
- (2) 「明治二十三年八月二十日夜、文殊師利発願経を読みて写す」とあるのに拠る。
- (3) 初出未詳、のち「調言」(明治三十四年九月春陽堂)に「婦女」と題して所収。塩谷贊は「幸田露伴」上(前掲)「新羽衣物語」で、『婦女』・「当世文反古余稿」とともに玉耶経に関する話であり、『婦女』は「当世文反古」発表の前後、すなわち明治二十四、五年成と推定。
- (4) 拙稿「幸田露伴の笑い話―「解頤茶話」を中心に」(平成二十六年七月「国語国文」)。
- (5) 高木卓「人間露伴」(露伴妹の言葉から)(昭和二十三年六月丹頂書房)。
- (6) 『日本仏教全集叢書資料総覧』(昭和六十一年十二月本の友社)。
- (7) 『仏書解説大辞典』一(昭和八年一月大東出版社)。
- (8) 『大藏経全解説大事典』(平成十年八月雄山閣出版)。
- (9) 前掲『仏書解説大辞典』七(昭和九年五月)。
- (10) 露伴が明示した典拠は以下である。第一話「十誦経卷九、縮、張三ノ五十九丁」、「彌沙塞部和醯五分律卷六、縮、張一ノ三十四丁」。第二話「摩訶僧祇律卷二十四、縮、列九ノ六十九丁」。第三話「中阿含経卷六十、縮、頁七ノ九十七丁」、「箭喩経、縮、頁八ノ八十九丁」。第四話「仏本行集経卷三十一、縮、頁八ノ四十三丁」、「参照、鼈と猿の話、鼈獼猴経、縮、宿五ノ二十八丁」。第五話「四分律卷五十、縮、列六ノ二十九丁」、「摩訶僧祇律卷二十七、縮、列九ノ八十六丁」。第六話「鹿母経、縮、頁六ノ三丁」。第七話「十誦律卷三十六、縮、張五ノ三十六丁」。第八話「仏説水牛経、縮、宿五ノ四十三丁」。第九話「雜宝藏経卷八、旧、既八ノ二十一丁」。第十話「旧雜譬喩経卷下」、「参照、兎王焚身の話、生経卷四、縮、宿五ノ四十三丁」、「雜宝藏経卷二、旧、既二ノ二丁」。第十一話「摩

訶僧祇律卷四、縮、列八ノ二十八丁」。第十二話「彌沙塞部和醯五分律卷三、縮、張一ノ十一丁」。第十三話「馬鳴菩薩大莊嚴經論卷六、縮、暑四ノ九十五丁」。第十四話「菩薩瓔珞經卷十一、縮、宇四ノ七十六丁」。第十五話「六度集經卷三、縮、宙三ノ六十丁」。

(11) 露伴は「四十三丁」と記すが、話は四十二丁表〜四十三丁表であり、始まりの「四十二丁表」とした。なお以下も同様に、第六話は露伴が「三丁」、話が二丁裏〜三丁裏により「二丁裏」、第九は露伴が「二十一丁」、話が二十丁裏〜二十二丁裏により「二十丁裏」、第十五話は露伴が「六十丁」、話が五十九丁裏〜六十丁表により「五十九丁裏」とした。

(12) 露伴は「十二丁」と記すが、正しくは「十七丁」である。なお第十五話も「宙三」(前掲注10)とあるが、「宙五」が正しい。

(13) 『露伴翁座談』(昭和二十六年一月角川書店)所収。昭和十一年十二月二十二日の談。

(14) 『大日本校訂大藏經』では「憔悴」、すなわち憔悴の意。

(15) 『大正新修大藏經』「雖」に拠る。

〔付記〕 引用文は原則として初出に拠り、漢字は常用漢字を用い、ルビを取捨した。なお、稿者による注は「」内に記した。また必要に応じて書き下し文を添えた。